

● 北 陸

響 敏 也

〈序、とき～伝説〉

茫洋と流れ去る「とき」を、生命の岸辺や浜辺に繋ぎとめようとするれば、やがて「伝説」を訪ねゆくことになる。

「伝説」は、それが正の価値でも負でもいいのだ。まずは「飛びっきりの記憶」を明日の自分へ、未来で待つ記憶へ、送り伝えよう。そんな思考の歩を進めれば、現在この瞬間も間断なく我々に波状攻撃を仕掛けているモノの正体が知れる。「悪意なき悪の総本山」「地球史上で最大規模の感染地獄」とも呼べる《コロナ》の一件は、まさしく「取って置ききの負の記憶」。正負の価値は、応対次第だ。

〈北陸3会場～負の記憶を正伝説へ〉

「負の記憶を洗い上げて、保存したいとき、人は記憶を〈伝説〉にして未来に送る」

負の記憶も正の伝説として未来へ送るほどの「気構え」こそ、《コロナ》が象徴する「地球規模襲来型」の厄災に強いのだ。

気構えや気養生とくれば、魂や心の領域で、文化・芸術の華、咲き誇るメンコンメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲じゃない。医学用語でもなく、民間医療語のように広まっている言葉。では、ちょうど良い免疫感になったところで、このあとは陸音楽界が、いかにしてコロナ襲来と対峙したか、いかに地球規模の経験を「星送り」して伝説としたかを。

〈北陸の3メンコン〉

北陸での《感染症の襲来》への、なんとも

「大人対応」なスタッフに感激せり。奥行きの深さ…、それは他の地域では簡単に求めて得られぬものだ。古くは日本文化の美質と伝わっていただろう。現代では干乾びて粉が吹いたようだ。思わず「どうしたの？」

だからこそ北陸の、じわじわ魂が、土地と冷水と冴えた空気に映える。とは言っても、この節、音楽会そのものが開かれてない。この1年間か2年間は、中止と延期、払い戻しばかりが目立つコンサート案内やネット・サイトを眺め…たのは数えるほどしかない。ハーモニーホール福井も富山オーバードホールも、そして石川県立音楽堂も、どのホールも上質の格調の高い活動が展開されていて活気がある。文化の異種格闘技と呼びたい独自の路線もキラリと光る。しかしこの機会にこそ直球勝負で行こう。プロ中のプロのコンサート、会場側と聴衆たちとの間を行き交う心遣い、それをしるのに絶好な室内楽は、音楽の民主主義。指揮者という独裁者もないし、演奏者同士の合議制で進む。ハーモニーホール福井ではコロナの厳しい条件下で、コンサートの灯も消さざるを得ないところだった。けれどホールのスタッフたちの「音楽を止めたくない」という心と、聴衆一人一人の「生の、本物の音楽に触れたい」との願いが、ピタリと焦点を結んで中止にならず、室内楽コンサートは、誰の胸にも「一音一音が、沁みる音楽体験」を残したはず。

富山オーバードホールでは期間中、本当にひとつだけ残った演奏会に聴衆が押し寄せた。まさに怒涛の寄り身。その勢いに手を引かれて、規定ギリギリまで聴衆席とした。演奏会は、若き鬼才パッティストーニ指揮する東京フィル。約100人近い演

奏家は、指揮棒と聴き手の「昂ぶる心」を敏感に察して、燃えに燃えた。客席には笑みと涙が入り混じった。

「音楽は、いいな」

誰もが、そう思った。

圧巻は石川県立音楽堂を中心に展開した音楽祭。畏れ多いような長い名の祭りだが愛称を、ガルガンチュアをもじったガルガンが合言葉。この音楽祭には先駆形があって、それは例のLFJ。集客は良く、クラシックに対する偏見や、幼稚な優越感などをすっかり洗い落とす音楽祭だから、そのネットワークに参加して何問題なかった。しかし「東京が諸外国からのプラン丸写しでも良いのなら、我々は独自の〈まつり〉を創る」と金沢は唯一、独自の道を選んで離脱の経緯がある。「ウィルスが来たからって姿勢は変えられるものか」。意気込みは伊達や酔狂じゃない。街中に無料コンサートが溢れ、ホールでは他で考えられない組み合わせでの舞台が拔群だ。先ほどの1日に4回コンサートが普通に開かれる。

しかし本来コロナの禍中では、ひとつのコンサート開催でさえも危うい。それでも金沢組は1日1公演などは想定外だ。スタッフたちは身を粉にして破格の1日4公演成立のため、コンサートの開演前、開演後、通路や階段の手すり、座席の周辺、その他あらゆる場所を消毒して楽屋周りも通路も、舞台も何もかも殺菌消毒した。それでこそその4回公演なのだ。こうして音楽祭は、気さくにしかも格調高く、最終日を迎えた。それは一般の聴衆はもちろん、業界の人々にも、驚きと感動を運んできた。

聴こえる？「コロナでも、やれば出来る」